「今北洪川老師に学ぶ」

臨濟宗円覚寺派管長 横田南嶺

今北洪川老師 参考資料

文化十三年（1816）

父母象峰権現に祈つて男を求む。七月出生。児たりし時夏はだぬがず、冬炉せず。終日父の書齋に侍して童戯に交わらず

文政五年（1822）七歳

父始めて句詠を授く。二年にして四書五経をそらんず

文政十一年（1828）十三歳

秦漢以上の書大抵業を卒ふ。

文政十二年（1829）十四歳

藤沢東咳に謁す。白文の徂徠集を出して之を讀ましむ。師琅琅として二三紙を讀過す。咳曰く、寧馨児と。

東咳の塾に在ること五年篠崎小竹、広瀬旭莊の、門に往来。

天保五年（1834）十九歳

業を浪華中之洲に授く。従学する者常に三十員を下らず。昼講夜講孜々として研究すること凡そ五年。一日孟子を講じ浩然の章に至つて忽ち声をあげて曰く、孟子は浩然を説く、我は浩然を行うと。門人皆驚異す。

是れより脱俗の志を抱く。父母之を憂う。田中氏の女を迎えて之に妻す。師彌志を堅うして動かす。頻りに明師を慕い、鬱々として樂しまず。父『禪門宝訓』を与えて讀ましむ。

出家。親眷、門人を招請して訣別の筵を設けんと欲す。

孔聖釈迦別人に非ず。

彼は見性と謂い此は仁と謂う。

脱塵怪しむこと莫れ、吾が粗放なることを。

箇の浩然一片の真を行ぜん。

田中氏に一紙を与えて曰く、我と汝と譬えば緋糸を以て土偶人を繋ぐが如し。今糸断れて我は山に入る。穢土厭離帖如件。九華道人 花押
阿麻氏

相国寺に入り大拙和尚を拝して師資の礼を執る。

天保十三年（1842）二七歳

深夜独り禅堂に入り精神を抖擻して確坐摂心、
眼睫を交えず。深く三昧に入り窓の白きを知ら
ず。只恍惚として晝板の声僅かに耳に入るを覚
ゆるのみ。怡悦に堪えず。：忽然として前後際
断して絶妙の佳境に入る。眼耳惺惺として眼皆
耳無きが如し。須臾にして胸次豁然として真眼
を開く。大好事を見、大好声を聞く。自知自得
恰も甘露を飲むが如し。従前の疑团、従前の学
解一時に徹底氷積す。忍俊不禁覚え口を衝き
連叫して曰く、我神悟せり我神悟せり。百万の
典教日下の灯、也太奇也太奇と。乃ち偈を説い
て曰く、疎濶なり孔夫子。相逢う阿堵の中。誰
に憑つてか多謝し去らん。好媒主人公。

弘化四年（1847）三二歳

備前曹源寺儀山善来に参ず。

安政二年（1855）四〇歳

瑞応院に住す。

安政六年（1859）四四歳

岩国永興寺に入寺。

文久二年（1862）四七歳

『禅海一瀾』を著述し、吉川経幹公に呈す。

慶応二年（1866）五一歳

第二次長州征伐。確として動かず。遺偈を書し
て兵の至るを待つ。偈に曰く魔を殺し仏を殺す

五十二年、末後冤無し、清風天に亘る。

明治八年（1875）六〇歳

五月東京十山総贖大教師選任の命を受けて上
京。十一月円覚寺住持職に任命される。十一月

円覚寺入寺。十二月八日開堂。

明治十年（1877）六二歳

八月退贖。九月円覚寺に帰る。正統院禅堂を開

く。正伝庵を枳木園と称し東京の居士参禅に励
む。

明治十八年（1885）七〇歳

円覚寺開山六百年大遠諱厳修。

明治二五年（1892）七七歳

一月十六日遷化。

鈴木大拙『今北洪川』より

筆者が老師にお目にかかったのは、確か老師示寂の前年であった。自分は二十を
越えたばかりの書生であったのみならず、世間のことなどについては全くの無経
験者であったので、円覚寺の居士寮に落ちついたときなどは、妙な心もちであつ
た。：洪川老師は奥から出てこられた。今日もそこに懸けられている油絵の額で

も分かるように、老師は堂々たる体軀の持ち主であつた。自分は何を言つて、老師は何と言われたか、今全く忘れてゐるだ、ただ一事あつて記憶に残る。それは老師が自分の生国を尋ねられて加賀の金沢だと答えたとき、老師は「北国のものは根氣がよい」といわれた。「大いにやれ」とはげまされたか、どうかは今覚えていない。そのとき老師の人格からどんな印象をうけたか、それも今覚えが無い。今覚えてゐるのはいつかの朝、參禪というものをやったとき、老師は隱寮の妙香池に臨んでゐる縁側で粗末な机に向かわれて簡素な椅子に腰掛けて今や朝餉をおあがりになるところであつた。それが簡素きわまるもの。自ら土鍋のお粥をよそつてお椀に移し、何か香のものでもあつたか、それは覚えていないが、とにかく土鍋だけはあつた。そしていかにも無造作に、その机の向こう側にあつた椅子を指して、それに坐れと言われた。そのときの問答も、また今全く記憶せぬ。ただ老師の風貌のいかにも飾り氣無く、いかにも誠実そのもののようなのが、深くわが心に銘じたのである。ある点では西田幾太郎君に似通うところがあるように、今考ふる。虎頭巖（隱寮は妙香池の畔、虎頭巖の上にあつて老樹で掩われている）で白衣の老僧が長方形の白木造りの机に向かつて、夏の朝早く土鍋から手盛りのお粥を啜る―禪僧とはこんなものかと、そのとき受けた印象、深く胸底に潜んで、今に忘れられない。

禪海一瀾より

山野小少より絳帷しやういの下に周旋しゆうせんすること十有五年。始めは四書五経を校こう究きゆうし、傍ら諸子百家を涉しやうりやう獵りやうするを以て天下第一の樂しみと為す。汲々として是れ勤め、一事の知れざる、一事の詳らかならざるを以て恥と為す。中ごろおもえらく、直饒、万巻の書を諳記するも、之を要するに仁義礼智の外に出ず。仁義礼智は道德の中に帰す。然れば則ち、学は道德を以て主と為すと。終に意う、古の儒は仁義道德を以て学者を鍛錬し、心知百体みな主とする所有り。今や名有つて実無し。故に心知百体また主とする所無く、唯是れ、古人の糟粕を事とするのみ。箇の得難き最靈の精神を以て、終身糟粕そうはくに区々として棺を覆うは、豈に憾ごらみ無かるべけんや。之を外にして必ず応に真実の學術在る有るべし。聖を去ること時悠かなり。我何にか適てきじゆう從じゆうせんと。

是より始めて禪書を読む。悦こゝろとして旧習有るが如し。偶々教外別伝、不立文字の語に撞著し、覚えず案を打つて曰く、卑衷ひちゆうに合すと。惜しいかな、明師無し。一日人有つて禪門宝訓一部を貸与す。試みに之を看過するに、言有りて曰く、昔、達觀の穎、初めて石門聰和尚に見ゆ。室中口舌の弁を馳騁ちへいす。聰曰く、子の説く所は乃ち紙上の語なり。其の心の精微せいゐの若ごときは、則ち未だ其の奥を觀ず。當に妙悟を求むべし。悟れば則ち超卓ちやうたく傑立けつりゆう、言に乗ぜず、句に滯らず。獅子王吼哮こうこう

すれば百獸震駭するが如し。迴つて文字の学を觀れば、何んぞ畜什を以て方に較ぶるのみならんやと。山野是に於いて發憤して曰く、我もまた人なり。曷ぞ人の為す所を為す能わざらんやと。直ちに家累を辭し、墳典を抛つて徧く明眼の師を尋ぬ。中略

愚、昔日此に慨く有り。一旦發憤して徧く明眼の師を尋ぬ。何の幸いぞ、一大老漢に輦下に遇著し、師資の礼を取る。遂に昧死して自ら誓う、「我、今より大道を弁究すること五年十年にして、若し了悟せずんば則ち朽木糞牆、世に於いて益無し。須く跡を丘壑に晦まして再びは面皮を人間に呈せざるべし」と。是の如く決心し、身を擲つて以て道に当たる。一衣一鉢、口に投ずるものは蔬菜糲食、身に触るるものは熱喝臆拳。胸中、時に或いは懊惱し、或いは悶絶するも、愈々激して衰えず。苦屈の久しき、一夜、定中に忽然として前後際断し絶妙の佳境に入る。恰も大死底の如く、一切物我有るを覺えず。ただ覺ゆ、吾が腔内の一氣、十方世界に彌満して、光曜無量なることを。須臾にして蘇息する者の如し。視聽言動、豁然として平日に異なれり。是に於いて、試みに天下の至理妙義を求むれば、頭頭に明らかに、物物上に顯る。歡喜の余り、自ら手の之を舞い足の之を踏むを忘る。即ち忙忙わしく連叫して曰く、「百万の典教、日下の灯、也太奇、也太奇」と。乃ち小偈を打して曰く、「疎濶なり孔夫子、相逢う阿堵の中、誰に憑りてか多謝し去らん、好媒主人公」と。直ちに走つて老漢の室を叩き、所見を呈す。老漢、完爾として休む。余曰く、「某、曾て禪に明悟有りと聞けり。今日始めて、古人の我を欺かざるを知る」と。時に天保辛丑の歳、四月二十七日の夕なり。

是より天下の老和尚の舌頭に瞞ぜられず、平生を慶快にし了る。是に於いて、更に望上心を激発し、天涯海角に奔走して諸名老に咨参すること十有余年、日用行事の間に於いて存養省察、愈々了ずれば愈々求め、百切千磋、之を琢し之を磨す。日々新たに日々日に新たにす。前後十五六年間、空過の光陰無く、竟に蘊奥を備の棲梧老漢の処に罄し、吾が志を成就す。

第三則 惟聖

書に曰く、惟れ聖も念う罔ければ狂と作り、惟れ狂も克く念えば聖と作る。

聖は人なり。狂もまた人なり。性情、豈にまた同じからざらんや。唯だ其の聖たるの所以の者は、其の自性を見得して明白なるを以てなり。喜、怒、哀、懼、愛、惡、欲の情、時に或いは発ると雖も、直ちに真淨明妙、一枚の大光と作して受用す。其れ狂たる所以の者は、自ら其の性の明潔なるを知らざるが故に、利、

衰、毀、譽、称、譏、苦、樂の風に漂溺せられ、七情交々相攻めて未だ始めより窮まり有らず。卒に自己本有の光輝を味没す。是を以て悟りと迷いと分かかれ、聖と狂と別る。之を為すこと如何。蓋し悟りの時、情みな性と為り、迷いの時、性、却つて情と為る。只須く迷情の本源を截断すべし。迷情の本源を截断するは即ち見性に在り。見性は即克念に在り。然れば則ち「克念作聖」の一語は、即ち吾が門、「見性成仏」の転語なり。語の異なるを以て之を怪しむこと莫れ。『詩』に曰く、「柯を伐り、柯を伐る。其の則遠からず」と。柯を採りて以て柯を刈る。なお以て遠しと為す。噫。

第七則 浩然

孟軻曰く、我善く吾が浩然の氣を養う。其の氣たるや、至大至剛、直を以て養うて害うこと無ければ、則ち天地の間に塞つ。

凡そ天下の儒流、孟軻浩然の章を読み、愬乎として過ぐるならば、真の儒人に非ず。山野、疇昔、此の章に逢いて求道の志、根ざせり。故に後來、常に歎じて云う、「大教、未だ東來せざる以前に当たりて此の卓見有り。孟軻は謂うべし、生まれながらにして之を知る者なり」と。

試みに學者に問う、正文二十九字、但だ一字のみ、生知の全力を用うる処有り、作麼生か、那一字。

第十五則 至誠

中庸に曰く、至誠息むこと無し。

大いなるかな、至誠の徳。天地に配して天地に預からず。万物に膈うて万物に干らず。寂然不動の中よりして、遂に感じて天下の故に通ず。流行して止息ことなし。一縁に因らず一法を立てず。而も、明明歴歴、一縁一法に昧からず。譬えば、以て鳥は春に鳴き、以て雷は夏に鳴り、以て虫は秋に鳴き、以て風は冬に鳴るが如し。其れ唯だ毫釐も欺かず。而も循環、息むこと無し。息むこと無きが故に悠遠、悠遠なるが故に高明なり。是れまた何物ぞ。只だ學者、己に反つて自得するに在るのみ。語に曰く、「其の物たるに式ならざれば、則ち其の物を生むこと測られず。」また曰く、「知、仁、勇の三者は天下の達徳なり。之を行う所以のものは一なり」と。故に山野常に言う、「孔門また、惟だ此の至誠一乗の法有るのみ。二無く、また三無し」と。予、昔日、警地の後、此の至誠の一語に於いて鍛究鍊磨、頗る正念工夫相続の力を得たり。其の恩洪大にして報ゆる所を知らず。如今、此の書編述の志願も全て此に基づく。乞う學者、至誠無息の滋味を細嚼せんことを。深く之を自得すれば、則ち正念工夫相続に於いて、其の力を得ること、必ず観るべきもの有らん。